

西大寺東西兩塔跡の發掘

發掘の目的

西大寺は東大寺に次ぐ奈良時代の大伽藍で、流記資財帳まで傳えられているにも拘らず、當時の遺跡は殆ど残されておらず、現存する塔跡すら果して東塔の遺跡そのものか否かの確証も得られない程の有様で、伽藍の中軸線すら明らかにし得ない実状であつた。今回の發掘の目的は、今は地上に土壇の片鱗あら残していない傳西塔跡を發掘し、東塔基壇周辺の調査と相まって、出来れば東西兩塔土壇の旧位置をつきつめ、伽藍の中軸線を出し、合わせて條坊の坪の中心を定め、平城京條坊研究の一資料とする所にあるのである。

發掘の經過

東塔の基壇そのものゝ發掘は昨年十二月に行つた。その結果土壇は地山を稍掘下げて、層状に築き、圓の一定の高さに築いた所で礎石をすえ、更に礎石の間に土をつき固めており、築土の下端の地山との境には玉石を入れていろことが判つたが、この玉石を入れた築土は基壇の外方にも十数尺抜つているのは何故か疑問を抱かせた。

今年三月にはこの土築の下端の状況から推して、西塔跡でも、同様な結果が現れるれば、例え基壇石等は全く失われていろにしても、西塔の存在とその位置を定め得るとの予想し、西塔跡とされている附近一帯を徹底的に發掘することとした。

最初先ず東塔壇の西方、旧龍池院跡に數條のトレンチを入れたのであるが、旧地表がひどく荒されていて、状況がつかめないので、瓦等の散布している低い部分と、地山の高い部分との境を含む一帯の表土を一面に剥がして、完全に塔上壇建立当初の築土段階を露出することとした。こうして總まくりをしてみると、地表の荒された状況も明

瞭となつたので、壇の築土と單なる地山との境を求めて行つた所、北よりの部分が遂にその境がつきつめ得られ、それより東方は地山、西方では地山を稍切下げ、その上に玉石をおいてその間を粘土で充填していゝ状況が認められた。然し更にその境を掘掲げると、その境界線が斜行するので、築土の平面は八角形にすることが判つた。よつて東塔の周辺でも八角形にならかを檢してせた所、果してそうなり、兩塔一致したのである。但し西塔跡では東塔附近の粘土層であるとの異なり、砂礫層となつていゝ部分が多いので、地山が切下げられて築土されていたのは西北部分にすぎず、壇の境界の明らかにされたのはその部分にとどまり、他は玉石の存在によつてその部分が壇ぬであることが知られる程度に終つた。壇の南と西の端は築地外になり、土地が切下げられていゝので、壇端の究明は不可能であつた。

發 振 結 果

東塔では四隅について發振あることが出来るので、八角土築の大きさを測定し得たが、その直徑は約八八尺、現塔基壇の一边の大きさは約五五尺、兩塔の推定中心距離は二九四尺で、奈良時代の尺にして三百尺と考えられる。

西大寺塔については寶曆十一年の資賤帳に

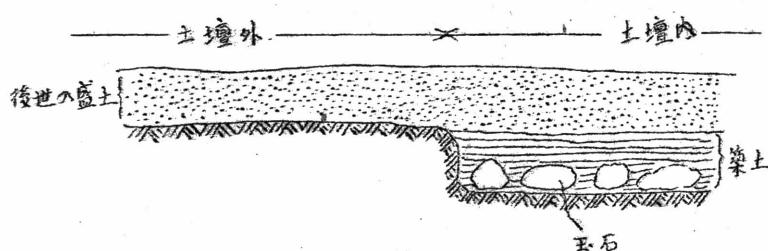
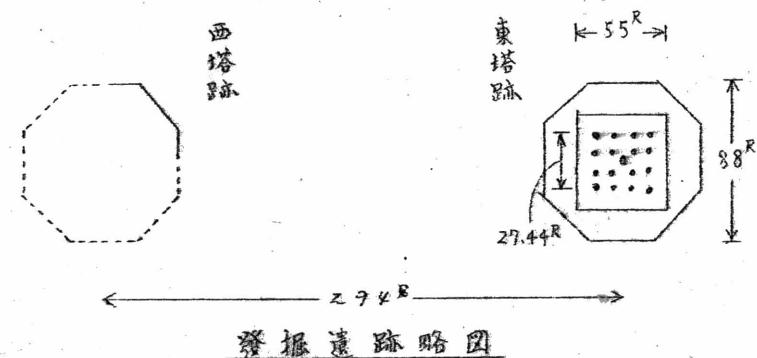
塔二基 五重各高十五丈

とあるが、現東塔礎石によつて知られる次の一边の長さは二七・四四尺であるから、その

高さは十五丈程となる筈で、現存塔跡の規模はこれと一致する。然し護國寺本諸事縁起集に旧流記曰として「有八破七重塔破壞^(角)々々」とあり、日本靈異記には藤原永平が「西大寺の八角の塔を四角に成し、七層を五層に減す。この罪に由りて」地獄に落ちた話が載つてゐる。このからすると、最初は八角七重塔を作る計画で工事が進められたことを思われる。今回発掘の基壇の大きさから推定すると、八角七重塔の初層の徑は六十尺程となるから、この塔が若し建つていたらその高さも三百尺を超ることとなつたであろう。何れにしても、東西相対させ八角七重塔の基壇の存在が実証され、その結果現塔基壇も亦創立當初の位置を保つてゐることが確証し得られたことは重要で、このようにして伽藍中軸線を明瞭にしようとする所期の目的も完全に達成し得られたのである。

出土遺物

西塔基壇外の旧地表は完全に失われており、遺物も當初の散布状態のまゝには残されていなかつたが、新古つきませて現在の凹所等に堆積していた。その内特に重要なのは、厚二分五厘位の三彩の陶器断片で、円形のものと角形のものとあり、針穴もあつて、走々地種と稚櫛種の木口飾と推定されるもの(十六片)、塔佛断片二、その他瓦々当四十六、平瓦々当六十四、各七八種等が発見されている。尚東塔八角基壇上築用地中から和銅錢二個を見出された。



发掘遺跡細部断面図